

国内の畜産物の需給動向

牛肉

5年3月の牛肉生産量、前年同月比3.4%増

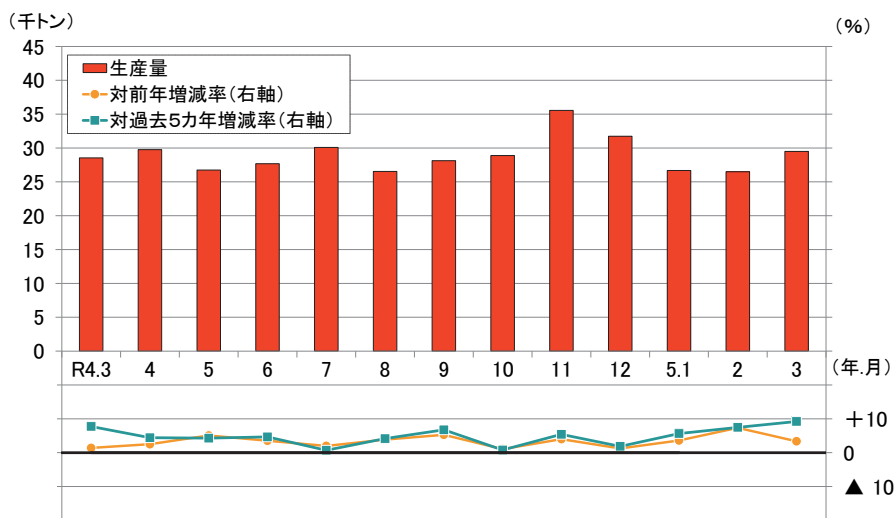
生産量

令和5年3月の牛肉生産量は、2万9499トン（前年同月比3.4%増）と前年同月をやや上回った（図1）。品種別では、和牛は1万3492トン（同2.8%増）とわずかに、交雑種は8045トン（同10.8%増）とかな

りの程度、それぞれ前年同月を上回った一方、乳用種は7445トン（同2.9%減）とわずかに前年同月を下回った。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、9.2%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

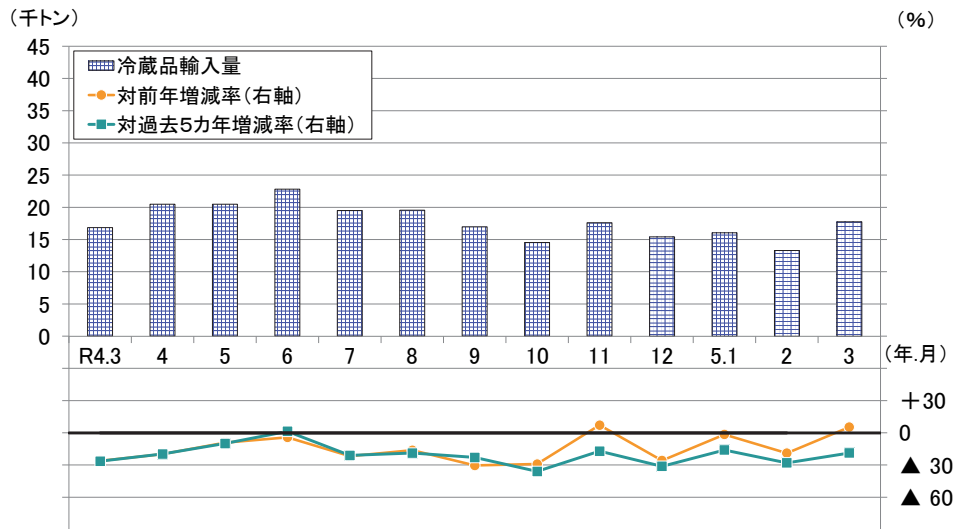
輸入量

3月の冷蔵品の輸入量は、前年同月の豪州産の輸入量が現地相場の高騰により少なかったことなどから、1万7758トン（同5.3%増）と前年同月をやや上回った（図2）。冷凍品は、前年同月の米国産およびカナダ産の輸入量が現地相場の高騰により少なかったことなどか

ら、1万8982トン（同11.6%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図3）。この結果、全体では3万6768トン（同8.4%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

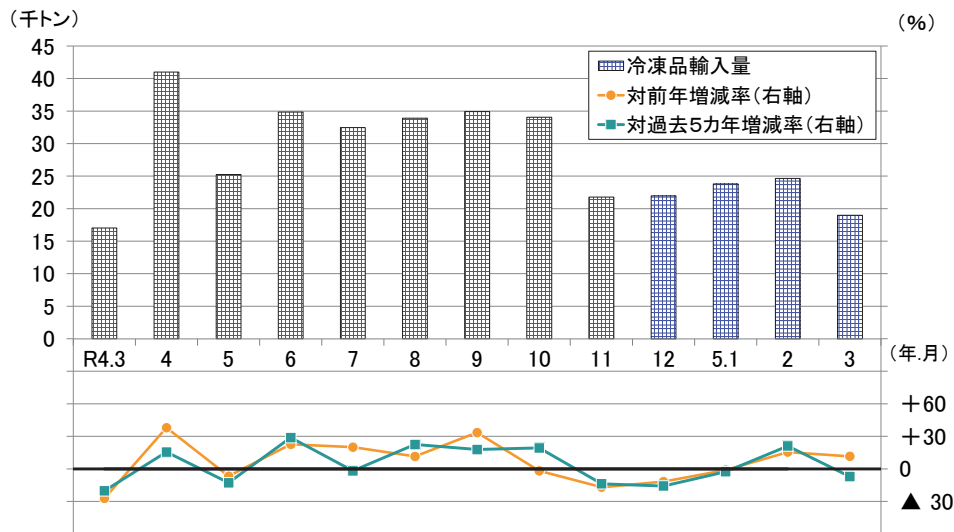
なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は18.8%減と大幅に、冷凍品は7.1%減とかなりの程度、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

3月の牛肉の家計消費量(全国1人当たり)は161グラム(同11.8%減)と前年同月をかなり大きく下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較でも、15.2%減とかなり大きく下回る結果となった。

3月の外食産業全体の売上高は、13日よ

りマスク着用が個人の判断に委ねられ、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関する規制緩和の動きが明確となる中、歓送迎会や春休みシーズンで個人や家族客が増加したことなどから、前年同月比で18.8%増と大幅に上回った(一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」)。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフ

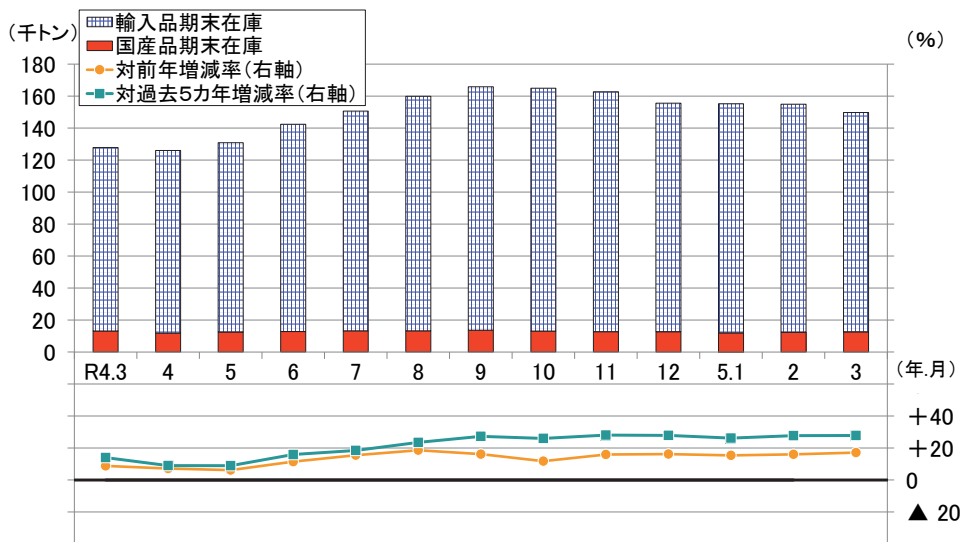
ードの洋風は、COVID - 19全盛期ほどの伸び率ではないものの引き続き堅調に推移し、同8.6%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風は、消費意欲の高まりが売り上げを押し上げ、同12.8%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、春休みおよび卒業シーズンで団体客が戻り、同39.7%増と前年同月を大幅に上回った。

推定期末在庫・推定出回り量

3月の推定期末在庫は、14万9724トン（同17.1%増）と前年同月を大幅に上回った（図4）。前年同月比で19カ月連続の増加となった。このうち、輸入品は13万7128トン（同19.6%増）と前年同月を大幅に上回った。

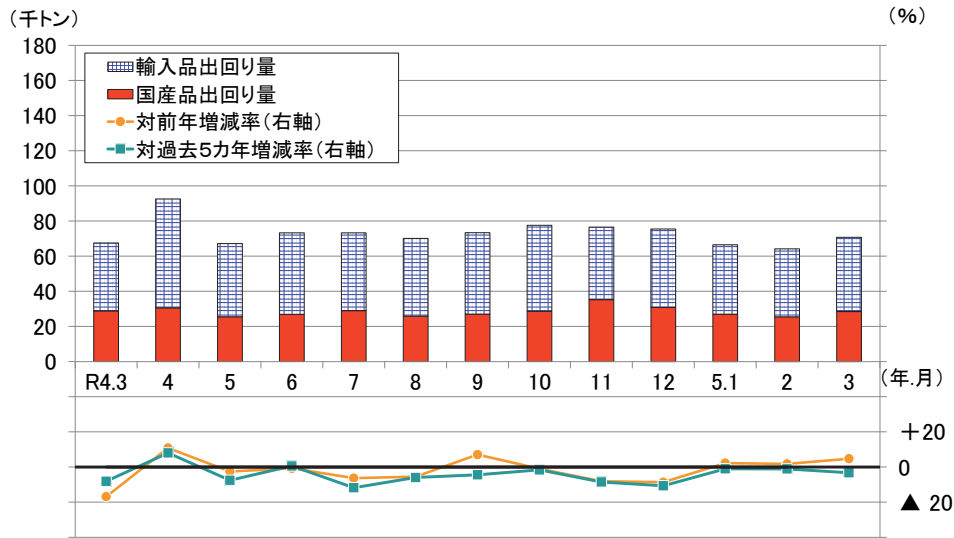
推定出回り量は、7万713トン（同4.7%増）と前年同月をやや上回った（図5）。このうち、国産品は2万8484トン（同1.3%減）と前年同月をわずかに下回った一方、輸入品は4万2229トン（同9.2%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大内田 一弘)

豚 肉

5年3月の豚肉生産量、前年同月比1.9%減

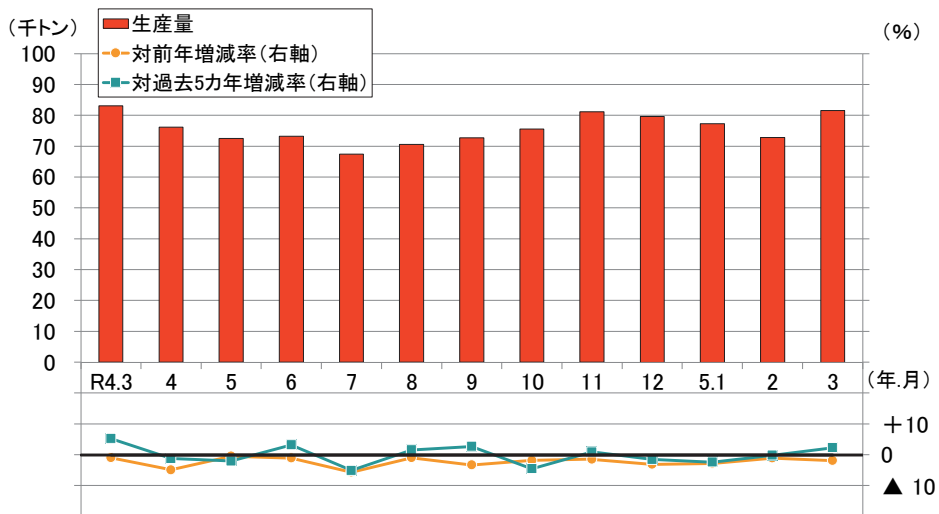
生産量

令和5年3月の豚肉生産量は、8万1586トン（前年同月比1.9%減）と前年同月をわ

ずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、2.3%増とわずかに上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：部分肉ベース。

輸入量

3月の冷蔵品の輸入量は、米国の現地相場の高止まりや為替の影響などから、3万5991トン（同7.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。一方、冷凍品は欧州産が現地相場の高騰などから減少したものの、チリ産の増加などから、3万3030

トン（同0.7%増）と前年同月をわずかに上回った（図3）。この結果、全体では6万9027トン（同3.9%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は2.1%減とわずかに、冷凍品は3.4%減とやや、いずれも下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移

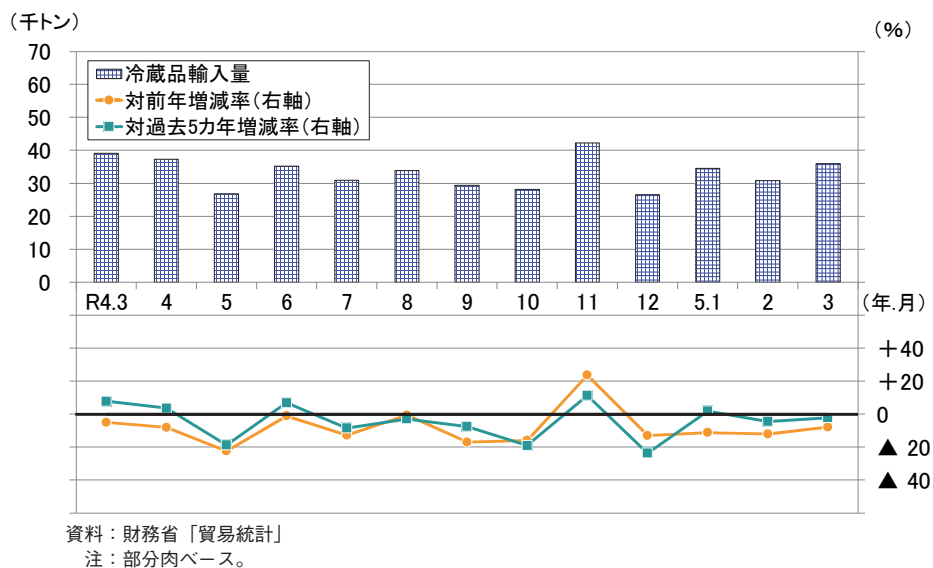
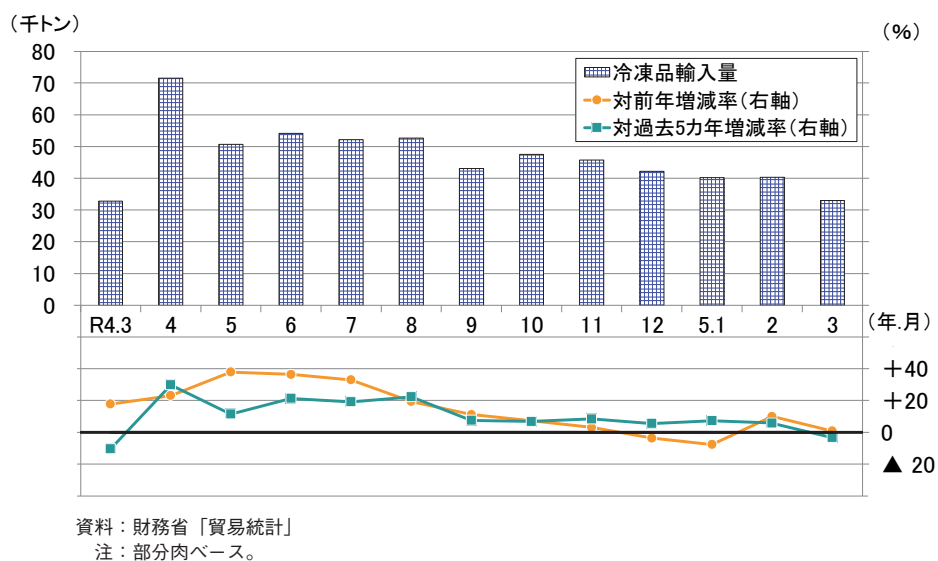


図3 冷凍豚肉輸入量の推移



家計消費量

3月の豚肉の家計消費量(全国1人当たり)は、640グラム(同3.1%減)と前年同月をやや下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較でも、1.1%減とわずかに下回る結果となった。

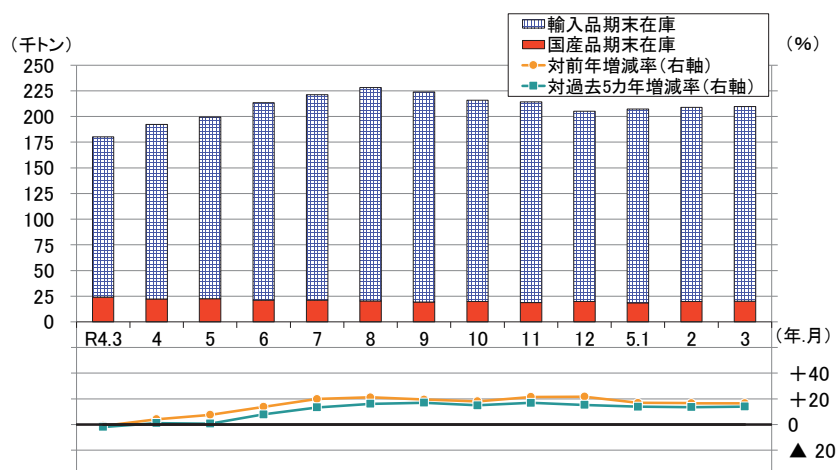
推定期末在庫・推定出回り量

3月の推定期末在庫は、20万9804トン(同16.5%増)と前年同月を大幅に上回った

(図4)。このうち、輸入品は、18万9572トン(同21.4%増)と前年同月を大幅に上回った。

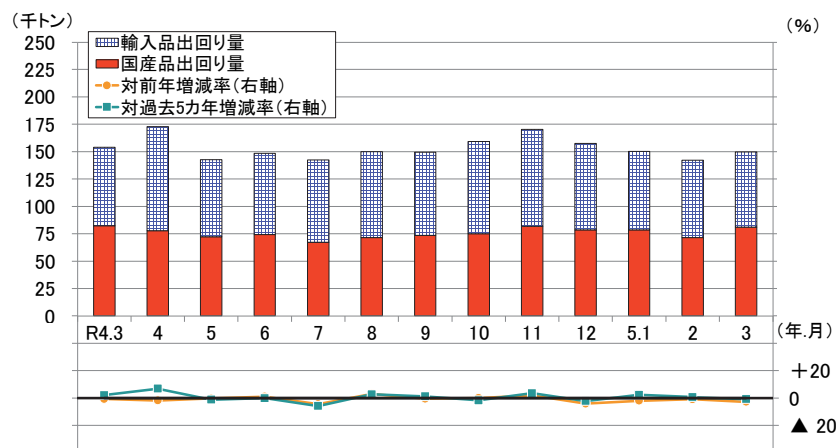
推定出回り量は14万9688トン(同2.8%減)と前年同月をわずかに下回った(図5)。このうち、国産品は8万1112トン(同1.3%減)とわずかに、輸入品は6万8576トン(同4.5%減)とやや、いずれも前年同月を下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)

鶏肉

5年3月の鶏肉生産量、前年同月比0.6%減

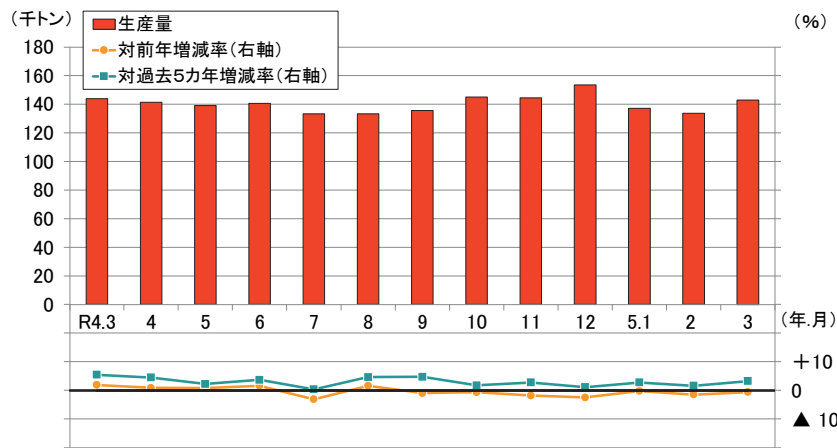
生産量

令和5年3月の鶏肉生産量は、14万3044トン（前年同月比0.6%減）と前年同月をわ

ずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、3.3%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

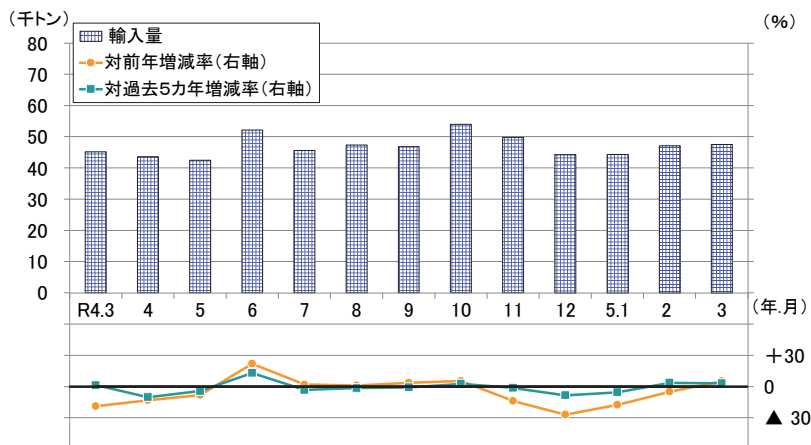
輸入量

3月の輸入量は、前年同月の輸入量がタイ国内におけるCOVID-19の影響により少

なかったことなどから、4万7545トン（同5.3%増）と前年同月をやや上回った（図2）。

なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較でも、3.2%増とやや上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

3月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、516グラム(同2.8%減)と前年同月をわずかに下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較では、2.0%増とわずかに上回る結果となった。

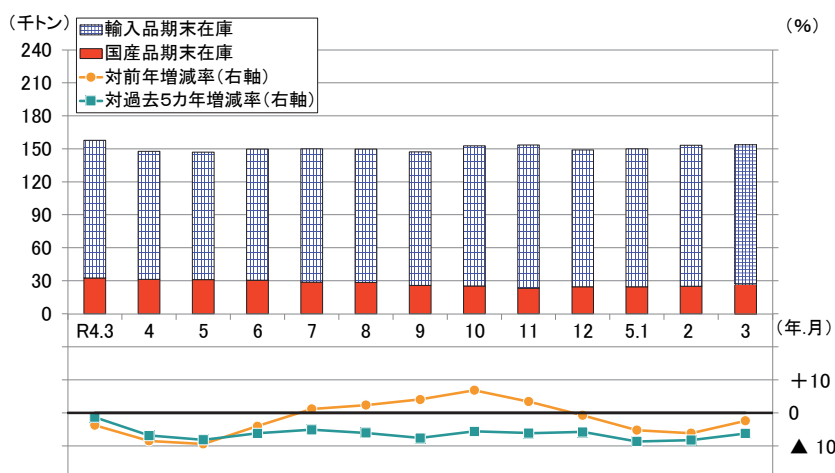
推定期末在庫・推定出回り量

3月の推定期末在庫は、15万3902トン(同2.4%減)と前年同月をわずかに下回っ

た(図3)。このうち、輸入品は12万6853トン(同1.4%増)と前年同月をわずかに上回った。

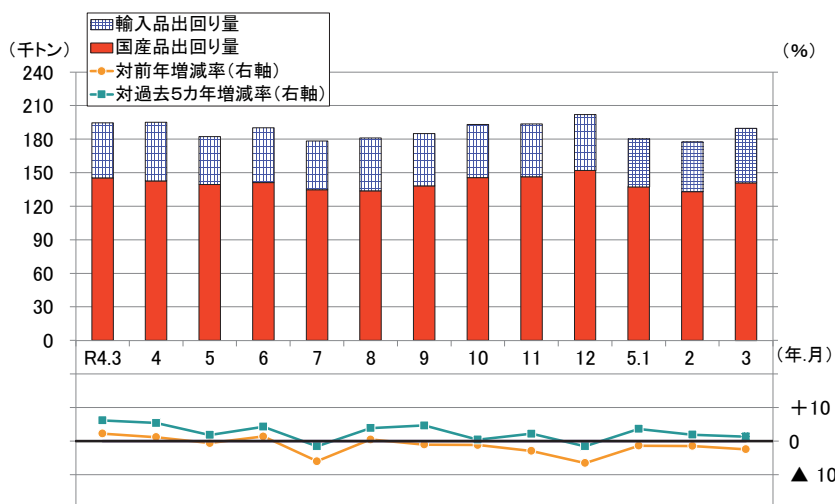
推定出回り量は、18万9779トン(同2.4%減)と前年同月をわずかに下回った(図4)。このうち、国産品は14万974トン(同3.0%減)とやや、輸入品は4万8805トン(同0.9%減)とわずかに、いずれも前年同月を下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

令和4年度の食肉の需給動向について

令和4年度(令和4年4月～令和5年3月)の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

【牛肉】 生産量は、前年度をやや上回る

4年度の牛肉生産量は、34万7794トン(前年度比3.5%増)と前年度をやや上回った(表1)。品種別では、乳用種は8万5256トン(同1.3%減)と前年度をわずかに下回った一方、和牛は16万5074トン(同2.8%増)とわずかに、交雑種は9万2226トン(同10.3%増)とかなりの程度、いずれも前年度を上回った。

乳用牛への性判別精液の利用が増加傾向にあることに加え、交雑種生産や受精卵移植による和牛生産が増加する中、乳用種は、これらの影響により減少したとみられる。一方で、和牛は繁殖雌牛の頭数が増加したこと、また、交雑種は、種付け時の交雑種の子牛価格が高かったことなどにより、それぞれ増加したとみられる。

輸入量は、前年度をわずかに下回る

4年度の牛肉輸入量は、56万2505トン(前年度比1.2%減)と3年連続で減少した。

主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、国内需要の低下、現地相場の高止まりや為替の影響により、21万4535トン(同14.8%減)と前年度をかなり大きく下回った。輸入先別のシェアを見ると、米国が全体の53%、豪州が同36%を占めている。米国産は、11万2805トン(同13.6%減)とかなり大きく、豪州産は、7万7588トン(同

16.1%減)と大幅に、いずれも前年度を下回った。

一方、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、前年度の輸入量が各国の現地価格の高騰により少なかったことなどから、34万7636トン(同9.7%増)と前年度をかなりの程度上回った。輸入先別のシェアを見ると、豪州が全体の37%、米国が同35%を占めている。豪州産は13万170トン(同3.8%減)と前年度をやや下回った一方、米国産は12万188トン(同31.5%増)と前年度を大幅に上回った。

推定出回り量は、前年度をわずかに下回る

4年度の牛肉の推定出回り量は、COVID-19および食品価格の値上げなどの影響から、88万622トン(前年度比0.7%減)となり、3年連続で減少した。このうち輸入品は、54万32トン(同3.5%減)と前年度をやや下回った。一方、国産品は、34万591トン(同4.0%増)と前年度をやや上回った。

年度末(令和5年3月)の推定期末在庫は14万9724トン(同17.1%増)と前年度末を大幅に上回った。このうち、9割を占める輸入品在庫は13万7128トン(同19.6%増)と前年度末を大幅に上回った一方、国産品在庫は1万2596トン(同4.4%減)と前年度末をやや下回った。

表1 牛肉需給表

年度	生産量								輸入量					
			うち和牛		うち交雑種		うち乳用種				うち冷蔵品		うち冷凍品	
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H30	332,849	1.0%	149,181	2.8%	88,725	2.2%	90,911	▲ 3.2%	619,686	8.4%	278,741	3.3%	340,422	13.0%
R1	329,642	▲ 1.0%	151,960	1.9%	84,178	▲ 5.1%	88,997	▲ 2.1%	622,366	0.4%	278,119	▲ 0.2%	343,623	0.9%
2	335,450	1.8%	160,544	5.6%	82,109	▲ 2.5%	87,536	▲ 1.6%	590,992	▲ 5.0%	258,136	▲ 7.2%	332,598	▲ 3.2%
3	336,083	0.2%	160,601	0.0%	83,630	1.9%	86,423	▲ 1.3%	569,107	▲ 3.7%	251,889	▲ 2.4%	316,918	▲ 4.7%
4	347,794	3.5%	165,074	2.8%	92,226	10.3%	85,256	▲ 1.3%	562,505	▲ 1.2%	214,535	▲ 14.8%	347,636	9.7%

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
			うち輸入品		うち国産品				うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H30	115,940	18.8%	107,206	21.7%	8,734	▲ 8.0%	930,362	2.9%	600,550	4.3%	329,812	0.6%
R1	126,843	9.4%	116,128	8.3%	10,715	22.7%	936,966	0.7%	613,444	2.1%	323,522	▲ 1.9%
2	117,475	▲ 7.4%	104,931	▲ 9.6%	12,544	17.1%	930,245	▲ 0.7%	602,189	▲ 1.8%	328,056	1.4%
3	127,825	8.8%	114,655	9.3%	13,170	5.0%	886,951	▲ 4.7%	559,383	▲ 7.1%	327,568	▲ 0.1%
4	149,724	17.1%	137,128	19.6%	12,596	▲ 4.4%	880,622	▲ 0.7%	540,032	▲ 3.5%	340,591	4.0%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は農畜産業振興機構調べ
注：部分肉ベース。輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品はくず肉を含まない。

【豚肉】

生産量は、前年度をわずかに下回る

4年度の豚肉生産量は、と畜頭数（前年度比2.1%減）および枝肉重量（同0.3%減）の減少などにより、90万783トン（同2.4%減）と前年度をわずかに下回った（表2）。

輸入量は、前年度をやや上回る

4年度の豚肉輸入量は96万5144トン（前年度比3.9%増）と、2年連続で前年度をやや上回り、過去最大の輸入量となった。

主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、北米の現地相場の高止まりや為替相場の変動などから39万1812トン（同8.2%減）と前年度をかなりの程度下回った。輸入先別のシェアを見ると、米国が全体の48%、カナダが同44%を占めている。米国産は、18万6475トン（同11.7%減）とかなり大き

く、カナダ産は17万3797トン（同10.4%減）とかなりの程度、いずれも前年度を下回った。

一方、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、価格面などで優位性のあったスペイン産の安定的な供給などにより、57万3285トン（同14.2%増）と前年度をかなり大きく上回った。輸入先別のシェアを見ると、スペインが全体の33%、メキシコが同16%、デンマークが15%を占めている。スペイン産は、18万9460トン（同39.1%増）と大幅に、デンマーク産は、8万4583トン（同4.0%増）とやや、いずれも前年度を上回った一方、メキシコ産は9万4512トン（同2.5%減）と前年度をわずかに下回った。

推定出回り量は、前年度をわずかに下回る

4年度の豚肉の推定出回り量は、COVID-19による行動制限を伴わない1

年となったことなどにより外食需要は増加したものの、COVID-19の影響による「巣ごもり需要」が落ち着きつつあることから183万4777トン（前年度比0.9%減）とわずかに減少した。このうち、国産品は90万3111トン（同2.0%減）と前年度をわずかに下回った一方、輸入品は93万1666トン（同0.1%増）と前年度並みとなった。

年度末（令和5年3月）の推定期末在庫は20万9804トン（同16.5%増）と前年度末を大幅に上回った。このうち、9割を占める輸入品在庫は18万9572トン（同21.4%増）と前年度末を大幅に上回った一方、国産品在庫は2万232トン（同15.7%減）と前年度末をかなり大きく下回った。

表2 豚肉需給表

年度	生産量		輸入量					
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	うち冷蔵品		うち冷凍品	
					トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H30	897,454	0.8%	916,172	▲1.0%	405,357	1.6%	510,794	▲3.0%
R1	902,877	0.6%	953,112	4.0%	415,663	2.5%	537,419	5.2%
2	916,614	1.5%	883,985	▲7.3%	418,240	0.6%	465,703	▲13.3%
3	922,656	0.7%	928,994	5.1%	426,836	2.1%	502,142	7.8%
4	900,783	▲2.4%	965,144	3.9%	391,812	▲8.2%	573,285	14.2%

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
	うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品	
H30	166,489	▲8.0%	145,268	▲9.5%	21,221	3.6%	1,827,425	0.9%	931,404	0.5%	896,020	1.3%
R1	210,137	26.2%	185,075	27.4%	25,062	18.1%	1,811,508	▲0.9%	913,305	▲1.9%	898,203	0.2%
2	181,984	▲13.4%	157,880	▲14.7%	24,104	▲3.8%	1,827,293	0.9%	911,180	▲0.2%	916,113	2.0%
3	180,095	▲1.0%	156,094	▲1.1%	24,001	▲0.4%	1,851,998	1.4%	930,780	2.2%	921,217	0.6%
4	209,804	16.5%	189,572	21.4%	20,232	▲15.7%	1,834,777	▲0.9%	931,666	0.1%	903,111	▲2.0%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は農畜産業振興機構調べ
注：部分肉ベース。輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品はくず肉を含まない。

【鶏肉】

生産量は、前年度をわずかに下回る

4年度の鶏肉生産量は、近年の好調な鶏肉消費を背景に、平成23年度以降前年度を上回って推移していたが、12年ぶりに167万9807トン（前年度比0.6%減）と前年度をわずかに下回った（表3）。

輸入量は、前年度をやや下回る

令和4年度の鶏肉輸入量は、56万5031トン（前年度比4.9%減）と前年度をやや下回った。

輸入先別のシェアを見ると、ブラジルが全体の73%、タイが同25%を占めている。ブラジル産は、中食需要の増加などにより前年度の輸入量が多かったことから、41万1629トン（同6.5%減）と前年度をかなりの程

度下回った。一方で、タイ産は、COVID-19の影響を受けていた現地工場の生産性の回復などから、14万413トン（同3.8%増）と前年度をやや上回った。

推定出回り量は、前年度をわずかに下回る

4年度の鶏肉の推定出回り量は、中食需要が堅調だったものの、前年度は巣ごもり需要や輸入品の出回り量が多かったことから、224万8589トン（前年度比1.8%減）と前年度をわずかに下回った。このうち、主

に家計消費用に仕向けられる国産品は168万5251トン（同0.0%減）と前年度並みとなった一方、加工用、外食・中食用に大部分が仕向けられる輸入品は56万3338トン（同6.7%減）と前年度をかなりの程度下回った。

年度末（令和5年3月）の推定期末在庫は15万3902トン（同2.4%減）と3年連続で前年度末をわずかに下回った。このうち、8割を占める輸入品在庫は12万6853トン（同1.4%増）と前年度末をわずかに上回った一方、国産品在庫は2万7049トン（同16.8%減）と前年度末を大幅に下回った。

表3 鶏肉需給表

年度	生産量		輸入量		推定期末在庫						推定出回り量					
					うち輸入品			うち国産品			うち輸入品			うち国産品		
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)
H30	1,599,823	0.7%	544,923	▲ 8.1%	152,329	▲ 13.7%	124,677	▲ 15.8%	27,652	▲ 2.7%	2,168,969	1.3%	568,369	1.9%	1,600,600	1.1%
R1	1,646,774	2.9%	572,118	5.0%	170,447	11.9%	139,326	11.7%	31,121	12.5%	2,200,774	1.5%	557,469	▲ 1.9%	1,643,305	2.7%
2	1,649,680	0.2%	552,832	▲ 3.4%	163,802	▲ 3.9%	135,022	▲ 3.1%	28,780	▲ 7.5%	2,209,157	0.4%	557,136	▲ 0.1%	1,652,021	0.5%
3	1,689,630	2.4%	594,223	7.5%	157,653	▲ 3.8%	125,160	▲ 7.3%	32,493	12.9%	2,290,002	3.7%	604,085	8.4%	1,685,917	2.1%
4	1,679,807	▲ 0.6%	565,031	▲ 4.9%	153,902	▲ 2.4%	126,853	1.4%	27,049	▲ 16.8%	2,248,589	▲ 1.8%	563,338	▲ 6.7%	1,685,251	▲ 0.0%

資料：財務省「貿易統計」、農畜産業振興機構調べ

注1：生産量は骨付き肉ベース。

注2：成鶏肉含む。

注3：輸入量には鶏肉以外の家きん肉を含まない。

（畜産振興部 田中 美宇）

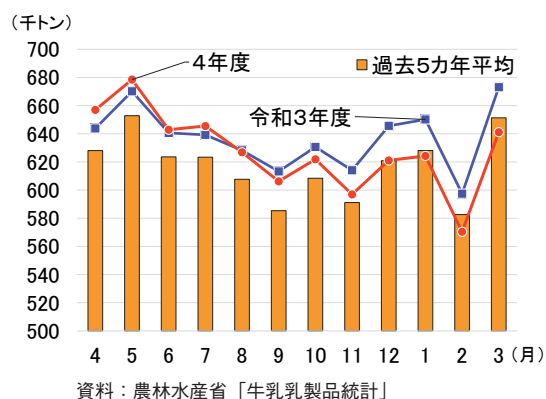
牛乳・乳製品

3月の脱脂粉乳在庫量、前年同月比34.1%減

3月の生乳生産量、前年同月比4.7%減

令和5年3月の生乳生産量は、64万1133トン（前年同月比4.7%減）と前年同月をやや下回り、8カ月連続で前年同月を下回った（図1）。地域別に見ると、北海道は35万5005トン（同5.5%減）、都府県は28万6128トン（同3.9%減）とともに前年同月をやや下回った。北海道は7カ月、都府県は8カ月連続でそれぞれ前年同月を下回った。これは生産抑制などによるものとみられる。

図1 生乳生産量の推移



3月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、31万6821トン（同3.3%減）と前年同月をやや下回った。このうち、業務用向けについては、2万7038トン（同7.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

乳製品向けは、32万431トン（同6.3%減）と前年同月をかなりの程度下回り、8カ月連続で前年同月を下回った。これを品目別

に見ると、クリーム向けは、6万2610トン（同1.6%増）と前年同月をわずかに上回った一方で、チーズ向けは、4万220トン（同3.5%減）と前年同月をやや下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、17万648トン（同10.6%減）と前年同月をかなりの程度下回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

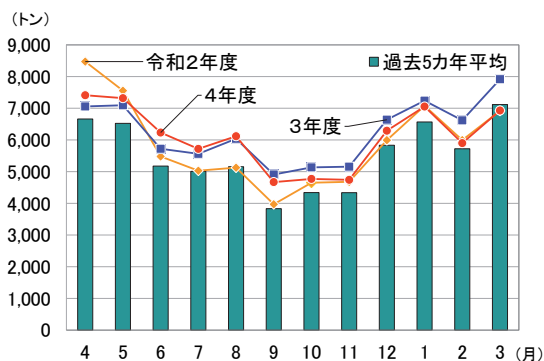
3月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は25万1995キロリットル（同3.3%減）と前年同月をやや下回り、成分調整牛乳は2万153キロリットル（同6.9%減）と前年同月をかなりの程度下回った。加工乳は、1万1977キロリットル（同9.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

乳製品のうち、クリームは1万483トン（同0.2%減）と前年同月並みとなった。

3月のバター在庫量、前年同月比27.1%減

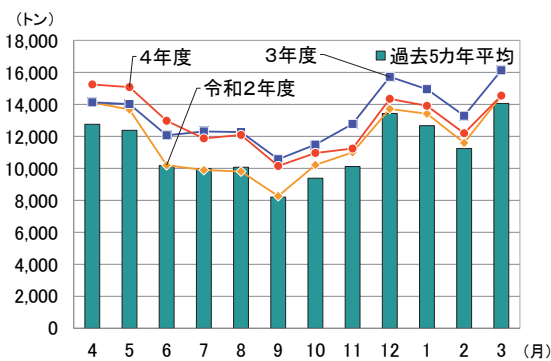
3月のバターの生産量は、6929トン（同12.5%減）と前年同月をかなり大きく下回り、7カ月連続で前年同月を下回った（図2）。一方で出回り量は9644トン（同10.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った（農畜産業振興機構調べ）。3月末の在庫量は、2万8831トン（同27.1%減）と前年同月を大幅に下回り、11カ月連続で前年同月を下回った（図3）。

図2 バターの生産量の推移



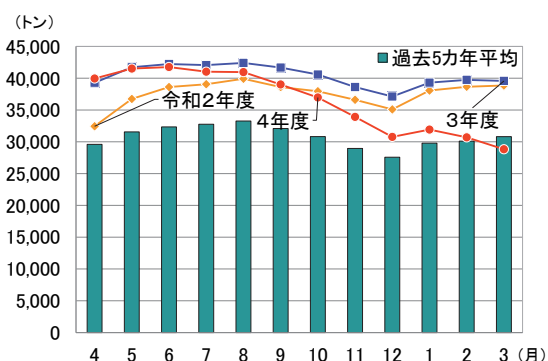
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図4 脱脂粉乳の生産量の推移



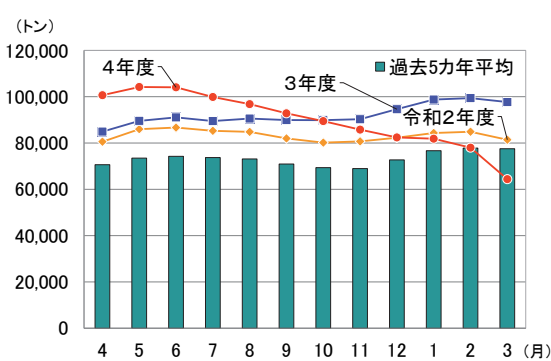
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図3 バターの期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図5 脱脂粉乳の期末在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

3月の脱脂粉乳在庫量、前年同月比34.1%減

3月の脱脂粉乳の生産量は、1万4547トン（同9.8%減）と前年同月をかなりの程度下回る一方で（図4）、出回り量は2万8165トン（同57.8%増）と前年同月を大幅に上回った（農畜産業振興機構調べ）。3月末の在庫量は、2月末の在庫量から1万3597トン減少し、6万4392トン（同34.1%減）と在庫解消対策などにより、10カ月連続で前月を下回り、6カ月連続で前年同月を下回った（図5）。

4月第1～3週における牛乳類全体の販売個数、前年同期比2.8～5.6%減で推移

一般社団法人Jミルクが公表したJミルク需給短信（週報）によると、4月第1～3週における牛乳類全体の販売個数は、前年同期比2.8～5.6%減で推移している。品目別では、全品目において前年同期を下回っており、牛乳が同2.0～5.1%減、成分調整牛乳が同15.6～16.3%減、加工乳が同2.8～6.6%減、乳飲料が同0.1～2.5%減で推移している。

（酪農乳業部 山下 侑真）

鶏卵

鶏卵卸売価格は300円台で推移

令和5年4月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり350円（前年同月比139円高）となり、8カ月連続で前年同月を上回った（図1）。2月以降は300円台の高水準で推移している。

同価格は、3月は月内に3度の上昇を経て350円となったが、4月は終始350円が続き、高水準を維持し価格の変動はなかった。前月との価格差を見ると、2月は47円高、3月は16円高、4月は7円高となっており、徐々に差額の幅が狭まっている。また、生産コスト高や、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）による採卵鶏の殺処分などの影響による供給不足などから、同価格は高止まりの状況となっている。

今後の供給量については、HPAI発生農家でのひなの導入再開まで約半年、発生前の飼養規模に戻るまでは約1年かかるため、徐々に生産量が回復するものの、引き続き影響が続くとみられている一方、需要面は、

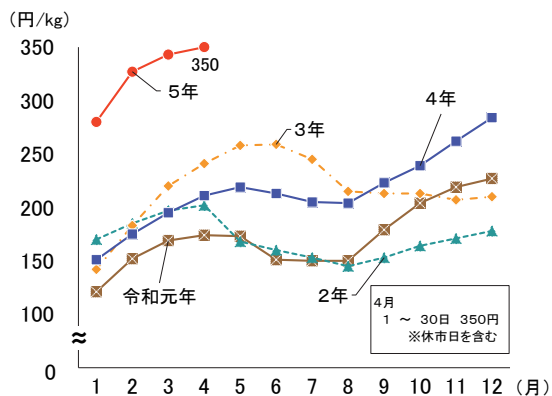
COVID-19の「第5類」移行により、外出の機会、旅行やインバウンド需要の増加による外食業界の回復が見込まれている。このような中、外食店舗の鶏卵を使ったメニューの一時的な中止や家庭でのテーブルエッグの買い控えなど、消費への影響が懸念されている。

令和3年の鶏卵産出額は前年を大幅に上回る

令和5年3月17日に農林水産省が公表した「令和3年農業総産出額及び生産農業所得」（確報）によると、令和3年の鶏卵の総産出額（全国）は5470億円（前年比20.3%増）と前年を大幅に上回った（図2）。

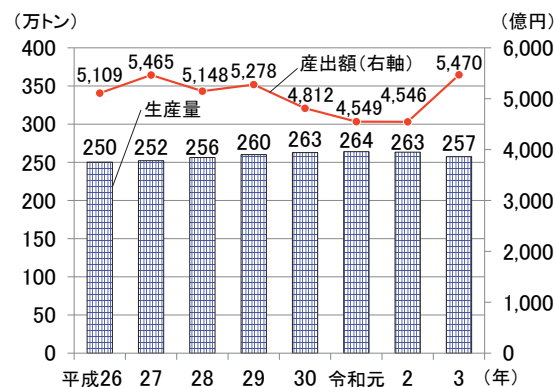
これは2年11月～3年3月にかけて大規模発生したHPAIによる影響で生産量が減少したことや巣ごもり需要が続いたことなどの影響で価格が上昇し、鶏卵産出額が大幅に増加したものと思われる。平成30年～令和2年は前年を下回って推移していたが、令和3

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

図2 鶏卵の産出額および生産量の推移



資料：農林水産省「鶏卵流通統計調査」、「生産農業所得統計」

年は4年ぶりに前年を上回った。

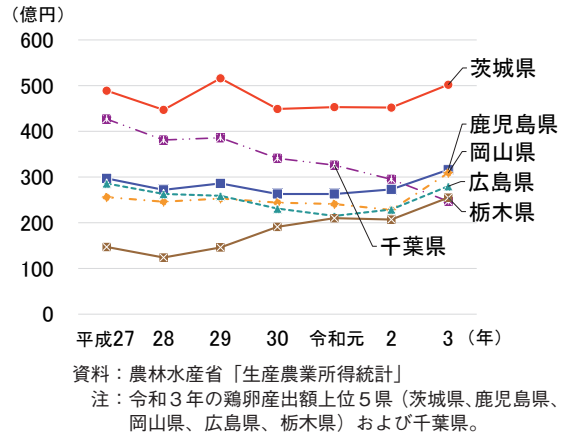
鶏卵生産量は平成27年以降、家庭用、業務加工用ともに需要が旺盛であったことから、増加傾向で推移し、28年以降は毎年約260万トン台の生産量で推移している。一方で産出額は、26～29年は5000億円台で推移していたが、30年および令和元年では、生産量は増加したものの鶏卵相場が低い水準で推移した結果、ともに前年を下回る水準となった。さらに2年は、前年に比べ3億円減少し、4546億円（前年比0.1%減）となった。これはCOVID-19の拡大の影響により業務用需要が減少したことや、HPAIの発生による生産量の減少などの影響を受けたものと思われる。

都道府県別の主な生産県の鶏卵産出額（都道府県別推計）^(注)を見ると、最も産出額が大きかったのは茨城県で502億円（全国シェア9.0%）となった（図3）。第2位は鹿児島県で316億円（同5.7%）、第3位は岡山県で309億円（同5.6%）となった。次いで、広島県は280億円（同5.0%）となり、今年度は第5位に栃木県が入り255億円（同4.6%）となった。

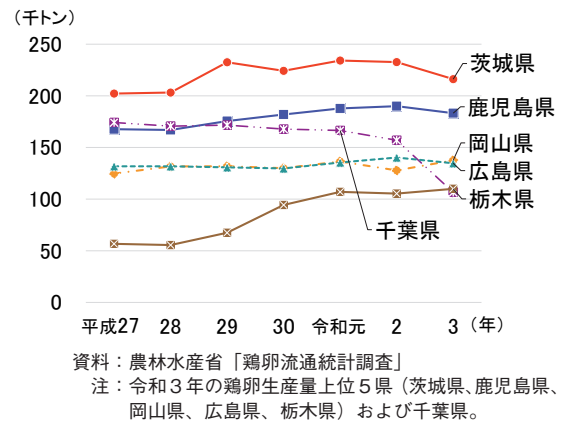
なお、前年2位だった千葉県は、HPAIの発生の影響などから第6位247億円（同4.5%）となった。

（注）都道府県別推計は、他の都道府県に販売された中間生産物（最終生産物となる農産物の生産のために再び投入される農産物をいい、種子や子豚、種卵などが該当する）を農業産出額に計上するため、都道府県別推計の合計値と全国推計の農業産出額は必ずしも一致しない。

図3 主な生産県の鶏卵産出額の推移



(参考) 主な生産県の鶏卵生産量の推移



(畜産振興部 生駒 千賀子)